巻頭言

# 学会誌のDuality

長谷川修司　〈会誌編集委員長　shuji@surface.phys.s.u-tokyo.ac.jp〉

学会誌は，何よりも会費を納めていただいている会員の皆様へのサービスを最優先のミッションとするのは当然です．実際，会誌編集委員会としては，会員の皆様に楽しんでいただける，あるいは会員の皆様の教育・研究等の活動に役立つ記事や情報を掲載することを第一に考えて編集作業を進めています．

しかし，それと同時に，今まではあまり意識されてこなかったと思いますが，学会の外，つまり非会員に向けた情報発信という重要な役割も学会誌は担っていると考えています．物理学周辺の科学者・技術者，一般市民や大学生・高校生，あるいは海外の研究者などへの情報発信は，これからますます重要になっていくし，それが学会のプレゼンスを高めることにつながっていくでしょう．たとえば，ノーベル賞発表の時期には，例年，受賞トピックスの解説文とともに関連する会誌記事をホームページ（HP）で公開しますが，そのときのアクセス数は極めて多数に登ります．一般市民からの期待は大きなものがあります．

学会誌は，このように学会の外と内の両方に顔を向ける必要があり，このような「外向きの顔」と「内向きの顔」を「学会誌のduality」と呼ぶことにします．

まず，「外向きの顔」に関してですが，最近，海外への情報発信力強化として学会誌をもっと活用できないかという議論が起こりつつあります．しかし，日本語の会誌で，しかも国内だけでしか流通していない会誌でどうやって海外に情報発信するのか，それよりも物理学会にはJPSJやPTEPという英文ジャーナルがあるじゃないか，それで十分だろう，と思われる会員諸氏も多いでしょう．

しかし，会誌に載っているたくさんの質の高い解説記事が，日本国内でしか読まれないというのはもったいないと思いませんか？　あれを英訳して，HPに掲載したら，きっと海外の研究者にもたくさん読まれるでしょう．英訳した会誌の解説記事を想像してみてください．それほど重厚長大なレビュー論文ではないけれど，Physics Todayの解説記事よりは物理がしっかり書かれたコンパクトで教育的なレビュー記事として世界中で読まれるはずです．これによって，世界のなかでの日本物理学会のプレゼンスが著しく向上し，その結果，JPSJやPTEPとの相乗効果も期待できるでしょう．

この第一歩として，国内配布の会誌は現状のまま日本語だけですが，リードページの英訳版を作り，英語版HPに掲載するところから始めたいと考えています．そのあと，記事の著者が希望すれば本文の英訳版も作ってもらい，逐次HPに掲載することを考えています．

次に，国内向けの「外向きの顔」についてですが，高校生，大学生，一般市民向けに，学会誌から（HPを通じて）情報を発信しようということは今までほとんど考えられてきませんでした．少なくとも毎年10月初旬のノーベル物理学賞発表のときには上述のように関連する過去の会誌記事を公開して，市民向け情報発信機能の役割を一部果たしていますが，十分ではありません．学会としては，科学セミナーや公開講座のような一般市民向けのイベントを毎年開催して好評を博していますので，そのようなイベントとコラボして科学コミュニケーションの役割を学会誌に持たせたいと考えているのですが，具体的な良いアイディアがありません．読者諸兄諸姉からのご提案ご意見をお願いします．

最後に学会誌の「内向きの顔」についてです．それぞれの専門分野の研究の最新情報を提供しつづけている会誌は，会員諸氏から高い評価を受けていると自負していますが，それだけでは十分ではないと感じています．会員の皆様に役立つ情報としてもう少し違った種類のものがあるのではないかと思っています．例えば，授業で役立つ，あるいは自分自身の復習に役立つレクチャーノートや実験基礎講座的な記事，科学行政や大学等の研究者コミュニティに関する時事ネタ，海外の研究環境の動向，中等教育やアウトリーチなどに関する情報，果ては物理学者の秋冬ファッションの今年の流行など，多様な情報を提供する「総合情報誌」としての学会誌を目指したいのですが，これまた具体的に実行に移せないでいます．そのために，サイエンスライターなどを活用してはどうかと会誌編集会議ではときどきアイディアが出ていますので，少しずつその方向を模索したいと考えています．

関連する話題を一つ．2019年4月をもって30年間にわたる平成時代が幕を閉じますが，それを受けて，最近，「平成の総まとめ」のような連載を始めている新聞を見かけます．物理学の分野でもここ30年間を振り返ってみると，ノーベル賞が多数出たりニホニウムが登録されたり，大学が法人化されたり，ITによって学術ジャーナルや我々の研究スタイルが大きく変わったり，中等教育では「ゆとり教育」に振れたと思ったら「脱ゆとり」に方針転換されたりと，さまざまな面で大きな変化が起こりました．そこで，平成時代の物理と研究者をとりまく環境の諸相を大づかみで振り返り，次の時代を展望する特集号を組めないか会誌編集会議で検討しています．実現するかどうかわかりませんが，このような研究者コミュニティに関連する多面的な話題を取り上げて，総合情報誌へ脱皮できないか，「内向きの顔」の充実を模索しています．

学会誌のdualityを拡充させるべく，会員諸氏からのご提案ご支援をお願いします．

（2018年6月4日原稿受付）



©2018 日本物理学会